

会 議 録

会 議 の 名 称	令和2年度第1回弘前市文化財審議委員会議
開 催 年 月 日	令和2年8月29日（土）
開 始 ・ 終 了 時 刻	午後1時30分から午後4時まで
開 催 場 所	久渡寺、普門院
議 長 等 の 氏 名	委員長 福井敏隆
出 席 者	委員長 福井敏隆 委員 岩瀬直樹 委員 内山淳一 委員 岡田俊治 委員 関根達人 委員 瀧本壽史 委員 山田巖子
欠 席 者	なし
事 務 局 職 員 の 職 氏 名	文化財課長 小山内一仁 同課長補佐 鳴海淳 同課主幹兼文化財保護係長 小石川透 同課埋蔵文化財係長 蔦川貴祥 同課主事 棟方隆仁
会 議 の 議 題	（1）文化財指定候補について 1） 円山応挙筆「幽霊図」 2） 普門院本堂
会 議 結 果	別添議事録のとおり
会 議 資 料 の 名 称	円山応挙筆「幽霊図」（返魂香之図）について 普門院本堂について 普門院図面 他
会 議 内 容 （ 発 言 者 、 発 言 内 容 、 審 議 経 過 、 結 論 等 ）	別添議事録のとおり

【会議内容要旨】

議題（１）久渡寺の幽霊画「反魂香之図」と普門院本堂の文化財指定候補について

【久渡寺】

内山委員 円山応挙の幽霊として知られているのは、久渡寺所蔵、カリフォルニア大学バークレー校所蔵、福岡市博物館所蔵の３幅。出来としては久渡寺、バークレー校のものが良い。

伝承によるとこの絵を当寺に奉納した森岡氏が、明和９年から安永２年にかけての京都滞在中に描かせたもので、愛妾なり娘がモデルになっているといわれているが、どこまで真偽を確かめられるかわからない。女性自体は当時の美人顔であり応挙の美人画の典型的な画風で特定の人物を描いているのかは絵からだけでは判断できない。

福井委員長 津軽一統誌によると、為信が津軽統一を行うときに森岡氏は活躍するがその後落ち目となり、久渡寺に寄進をして祈願寺のようにしていた記録がみられる。

箱の裏書についてはおそらくのちの住職が経緯を書いたもの。

内山委員 指定の際に応挙の真筆であると判断できるか。絵から見ると応挙であると判断できるが慎重な人は「伝」をつけたがる。

伝承と、森山が京都に滞在していたことから考えると信憑性は高い。安永頃の応挙の一番良いころの作品であり、京美人の描き方が確立していたということもうかがえる。

応挙のレベルは贋作は難しい。３点描かれたということであるから、バークレー校、久渡寺のものがそのうちの２点であろうと思う。伝であれば世の中にいくつもあるが、伝承、来歴がある程度わかる分信憑性は高い。

応挙は写生をとにかく大事にしており、この時期に「人物正写惣本」という人物図鑑のようなものを作っている。人物の類型化を志向しタイプ別に表現しようとしていた意識が強く、久渡寺、バークレーのものは洗い髪の完成形として描かれたものだと思うが、どちらが先行するかは判らない。

関根委員 安永頃の作品だとすると天明４年まで森岡家で持っていたということになるか。なぜ天明４年になって寄進するつもりになったのか。一年後に飢饉収束政策の失敗を受けて森岡が自害することや、モデルがいるとすれば回忌も考えられるが。モデルが娘であればかつて調査した墓のデータベー

スや寺の過去帳で調べられるかもしれない。

瀧本委員 墨色の状態はどう見るか。

内山委員 かなり状態は良い。年に一時間しか開かないということにしていたおかげが一番落ちやすい紅まで残っている。

表装に関して、福岡本と同じく描き表装で、久渡寺は柳、福岡本は秋草である。柳の表現は円山派と見れなくもないが本紙に対して少しうるさく、京都ではなくこちらに持ってきてから表具されたものではないか。箱も古く描かれた当時のものと考えてもよい。私見では江戸初期まで遡るように思える。

福井委員長 本件について文化財指定に向け詳細な調査を行いたい。

【普門院】

事務局 屋根のかけ方、様式などが異なる聖堂、礼堂が一体化している特殊な建物である。総代の方の話ではかつて修理した際、床板を剥いだ際には増築の形跡はなかったとのこと。住職の話では屋根には接いだ跡があるということである。

正堂側の床は一段高く高覧を廻しているが礼堂側には何も置かれていない。

岡田委員 垂木を見ると建物は別のものだと思う。外長押の高さも異なるし、礼堂側には土台に東が入っていない。

事務局 建物内部は外から見た屋根の形状と同様、通常の観音堂では見られない形式がみられる。一段低くなっている部分があるのが特殊であり、一段高くなる側に内陣のような部分が設けられ、須弥壇前に礼堂部分にあたる広い空間がみられる形は他では見られない。

来迎柱の上に台を乗せ組物を置く形式は古く、総代の方によると当初からいじられた形跡はなく建物の最初の時の形と変わらないと考えられるとのこと。また、須弥壇下部の裏あたりは手が入っているようだが、背部の来迎壁周辺はそのままのよう。彩色は自体は上手な雰囲気はないが、逆に言うとうちの大工の手によるものであると考えることもできる。彩色部分はお寺のほうで近年クリーニングし綺麗になったもの。

先日、山田委員に尋ねられた部分で、壁面に女芸者しまとある。年次がわからないのでいつ頃のものかはわからない。

福井委員長 柱の墨書きには文政9年とみえ、柱自体が少なくとも文政9年にはあったことがうかがえる。参詣仕候とあることから参詣記念に書かれたものだろう。一番年次の古い墨書きは文政6年のものようである。

事務局 本堂の一番の特徴は形式の違う屋根がそれぞれ葺かれているというところにある。また、うまく敷地の状況を考えながら地元の大工を使い今の形までもっていったところも特徴。

こちらの正堂と呼ばれている観音堂ですが、同じくらいの時期のもので津軽地方に残っているのは少ない。乳井の毘沙門堂は少し規模は大きいですが、巖鬼山神社の本堂とはほぼ同規模である。当時の観音堂の定型の大きさがこのようなものであったのだろうと考えられる。

礼堂の部分に関しては、柱の墨書を見る限り文政期に遡ることができ、増改築を経たことで屋根の形状などが違うのかもしれないと考えられる。奥の来迎壁のまわりの彩色などもそうだが、当時から用途が変わらず観音堂として使用されてきた建物で、19世紀前半まで遡れるということがわかる建物としては価値があるものと事務局では考えている。

福井委員長 本件についても担当の岡田委員と事務局のほうで調査を進めていただきたい。